

「津波てんでんこ」にこめられた

家族の思い

片田敏孝

「津波てんでんこ」ということばを知っているだろうか。東日本大震災の被災地、三陸沿岸部に伝わることばで、津波のときには、てんでんばらばら、つまり一人ひとりで逃げよとの先人の教えである。

津波のときには、親子であっても互いを気にせず、まずは自分一人でも逃げよと教えるこのことばは、津波からの避難はそれほどまでに厳しいのだということを教えてくれることばと理解できる。しかしその一方で、家族の絆を断ってでも生き延びよと教えているようにも聞こえ、何とも薄情なことばのようにも思えてくる。年老いた親を見捨てて逃げてしまえ。母親であっても子どもを見捨てて逃げてしまえ。「津波てんでんこ」の教えをそのまま理解すれば、そんな薄情な状況が頭に浮かんでくる。

なぜ先人はこんな薄情なことばを残したのだろうか。そして、「津波てんでんこ」は本当にそんな薄情なことを求めることばなのだろうか。

東日本大震災の被災地でもある東北地方の三陸沿岸部は、過去繰り返し津波の被害を受けてきた地域である。明治29年に発生した明治三陸津波では、2万2千人もの命が犠牲になった。宮古市田老では、約1,800人だった当時の村人のほぼ全員が亡くなり、生き残ったのは沖に漁に出ていた漁師などわずか36人だった。釜石市でも、当時の人口約6,500人のうち、実に4,000人の方が犠牲になるなど、三陸沿岸の地域では、一家全滅、地域全滅という悲惨な被害を繰り返してきた。

これほど大きな被害が繰り返された背景には、確かに家族の絆が大きく関わりを持っている。地震のあと、必死にわが子を探す母親が津波にのまれていった。祖父母を気遣い迎えに行った若者が津波にのまれていった。しかし、このような母親や若者の行動を、「津波てんでんこ」が教えるように、制止することはできるのだろうか。自分の命を守ることと、最愛の家族の命を守りたいと思う気持ちとの間に生じる葛藤のなかで、母親が懸命にわが子を探すことは、親として、人として避けようのない行動なのではないだろうか。そして、無情にもその強い家族の絆が被害を拡大させてしまうのだ。

家族の絆が被害を拡大してきた悲しい歴史の繰り返しのなかで、「津波てんでんこ」は一人ひとりに自分の命を最優先に守り抜けと教える。その教えは、家族の絆を断ち切っても、自分の命を守ることを求めているように思える。しかし、本当にそうなのだろうか。自分の命を最優先に守ることは、家族の絆を断ち切ることに直結することなのだろうか。

東日本大震災の大津波に襲われた岩手県釜石市では、多くの子どもたちが懸命に避難をして自分の命を守り抜いた。防災学習を通じて過去の悲しい被害の

歴史を学び、津波の恐ろしさを理解し、いかなる津波であっても、自分の命を守ることは避難すること以外にないことを学んでいた。しかし、釜石の子どもたちが懸命に避難したのは、津波の恐ろしさを理解していたからだけではなかった。

「大きな地震のあと、君のお母さんやお父さんはどう思う？」

そんな問い掛けに、釜石の子どもたちは心配して自分を懸命に探してくれる母親の姿を思い浮かべた。そして、そこに津波が襲いかかる……。子どもたちは気付いた。自分の命は自分だけのものではないこと、自分の命をわがこと以上に大事に思ってくれるお母さんがいること、そしてお母さんの命を守るためには、自分がしっかり避難する子にならなければならないことに気付いたのだ。お母さんが迎えに来なくても、自分がしっかり避難する子になって、お母さんがそれを信じてくれれば自分を探さずお母さんも避難してくれると思った釜石の子どもたちは、迫り来る津波のなかで懸命に避難したのだった。

防災学習のあと、「お母さん、あのね。僕は公園にいるとき大きい地震があったら、あの高台に逃げるんだよ」と、ある釜石の子どもは台所に立つお母さんに話しかけたという。このお母さんは、東日本大震災の揺れのなか、あの日の台所での子どもとの会話を思い出した。そして、わが子が絶対に逃げているとの確信とともに、自分のことを気遣ってくれたわが子に涙を流したという。

釜石の子どもたちの懸命な避難を振り返るとき、「津波てんでんこ」ということばは、決して家族の絆を断ち切れと教えることばではないことに気付かされる。確かにその日そのとき、「津波てんでんこ」を実行することは難しいのかもしれない。しかし、日頃から一人ひとりが自分の命に責任を持ち、それを家族が互いに信頼し合う家庭であるならば、「津波てんでんこ」は実行することが可能になる。先人は、そんな絆で結ばれた家族のあり方を教えてくれたのではないだろうか。

それは、災害で命を落とさない家庭や地域を作り、防災文化を醸成させていく君たちへのメッセージでもあるのだ。

2013（平成25）年3月



片田敏孝（かただ としたか）

群馬大学広域首都圏防災研究センター長・群馬大学大学院工学研究科・教授。専門は災害社会学。災害への危機管理対応、災害情報伝達、防災教育、避難誘導策のあり方等について研究するとともに、地域での防災活動を全国各地で展開している。2012年防災功労者内閣総理大臣表彰、2012年海洋立国推進功労者表彰、2012年ヘルシー・ソサエティ賞受賞。現在、日本災害情報学会理事。日本自然災害学会理事。兵庫県防災教育副読本作成検討委員会副委員長。釜石市における児童・生徒への津波防災教育の取り組みが、東日本大震災時の避難へとつながった。